葬られし真相

フォルティッシモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
葬られし真相

【Ｎコード】
Ｎ４５８０Ｎ

【作者名】
フォルティッシモ

【あらすじ】
友人たちと別荘に遊びに来た駿。彼がまどろみから目覚めると、目の前には死体がぶら下がっていた……

「馬鹿野郎！　駿、これは何のつもりだ！　ここを開けろ！」
うん……？　少しまどろんでいたのか。この声は宗司か？　えっと、菜々美の別荘に昔なじみの六人組で遊びに来て、響子にお茶に誘われて……それからどうしたんだっけ？　ぼんやりした世界が次第に焦点を取り戻してくる。それにしてもこいつは何をそんな慌てて……　え？
なんだ、これは。
何かが吊るされている。でかい。黒い物に覆われた部分が縄でくくられ、それにつながった物体が力なく垂れ下がっている。物体の左右には少し茶色っぽい棒状の物がつながっていて、左のほうは赤い液体が滴っている。棒の先端は五つに枝分かれして……ってなんだか人間の手みたいだな。……手？
これは紛れもない死体じゃないか。
「何を騒いでるんだよ。宗司、痴話ゲンカなら外で……」
「亮、この扉を見ろ！　これが冗談に見えるってのかよ！」
「え？　これは……血？　サヨナラって……どういう……」
扉の向こうで友人達の声がする。部屋の中には俺と死体が一人ずつ。誰がこんなことを？　いったい誰にこんなことができる？
え？　俺？
「くそったれがっ、扉をぶち破るぞ。お前も手伝え！」
轟音。二人の容赦ない体当たりが古臭い扉を揺さぶっている。

何でこんなことになっている。どうすれば。俺は何もしてないのに。信じてくれるだろうか？　部屋に俺しかいないこの状況で？
窓を見る。しっかり施錠されていた。ここから犯人が逃げていったことにするか？　二階だし、飛び降りられないことはない。ちらりと外を覗うと、訝しげにこちらを見上げている菜々美と沙良が視界に入り慌てて首を引っ込める。ここは駄目だ。他に窓は……ない。
気絶させられたふりでもするか？　それなら二人がこちらの騒ぎに気づく前に逃げたことにもできる。
いや、それも駄目だ。それにはまずこの窓を開けなければならない。菜々美と沙良が窓を凝視しているこの状況で。そのうち隙ができるだろうか？　扉が持ちこたえているわずかな間に？
無理だ。気づかれるに決まってる。

扉が耳障りな音を立てて歪んだ。もうじき破られるだろう。ベッドの下、本棚の後ろ、押入れの中。隠れる場所はたくさんある。だが隠れてどうする？　そんなことをしたらいっそう誰も信じてくれなくなるだけではないのか……

力尽きた扉がついに弾け飛んだ。宗司と亮が勢い余って倒れこむのがベッドの下から見えた。
「ひっ……　うわあっ、あああああっ」
「落ち着け！　お前は他の連中を呼んで来い！　警察もだ！」
何度か壁にぶつかり、駆け出していく足音が聞こえる。亮が皆を呼びに言ったのだろう。これはチャンスだ。宗司が何かに気をとられてくれればその隙に……
「宗司君……？」
「響子、お前は出てろ！　この部屋に入るんじゃねえ！」
「え？　で、でも……」
「つべこべ言うな！　そこでおとなしくしてろ！　こっちを見るんじゃねえぞ！」

「う、うん……」
響子……　なんでこんなときに。彼女に死体を見せまいとしているのであろう、宗司が怒鳴っている。おそらく彼女は部屋の外にいるとみていい。これじゃ脱出は不可能だ。
いや、響子なら俺の話を聞いてくれるんじゃないか。彼女なら俺の言葉を信じてかくまってくれるかもしれない。いや、皆を説得さえしてくれるだろう。大体俺は何もしていないんだ。なぜこそこそする必要がある。
「何があったの!?　首吊りって正気!?　冗談だったら許さないわよ!」
「本当だ!　菜々美は来なくていい!　沙良は遺体を見てくれ!」
あれこれ考えているうちに三人が到着したようだ。そういえば沙良は看護士だったか。皆そろってしまった以上、本格的に逃げるのは無理そうだ。そろそろ腹をくくって……って

あれ?　全員そろってる?

「だいだい死後二時間ってとこね。正確なところは警察が来ないとわからないわ。でも、ここに入ったとき窓も扉も確かに鍵は閉まってたのよね?」
「確かだ。亮と俺が確認してる。そうだな?」
「え?　た、確かに扉は閉まってたよ。窓は……よく覚えてないけど、多分閉まってたように思う」
「菜々美、この部屋の鍵は?　マスターキーとかあるの?」
「え、えっと、マスターキーは私がいつもポケットに入れてます。今も……ほら、これ」
「ふーむ、菜々美とはずっと一緒に三時間ぐらいバトミントンやってたからねえ。それで鍵を閉めるのは不可能か」
「あ、当たり前ですっ!」

「いや、悪い悪い。で、扉には血文字で『サヨナラ』……か」

皆が何か話しているが耳に入ってこない。この別荘には六人しかいないはず。それなのに、今、そこで五人の友人が話してて、死体があって、俺はここに隠れている。

あの死体はなんだ？

「これはもう駿君の自殺で決まりじゃないかしらね。残念だけど」
「馬鹿っ、響子に聞こえ……」
「駿君？　い、今なんていったの？　駿君が……自殺？」
「響子っ、見るんじゃねえ！　沙良、押さえてくれ！」
「駿君？　その人駿君なの？　駿君、駿君、ねえってば！　嘘よっ、駿君が死ぬはずないっっ！！　早く彼を下ろしてっ！　まだ、まだ生きてるに違いないわ！　速く手当てをしてよっ！　離して、駿君っ、駿君っっ！」

はあ？　おい、何を言っているんだよ。駿はここだよ。ちょっと事情があって隠れてただけだ。びっくりしたか？

もはや疑われるかもなんてことは忘れてベッドの下から這い出る。きっと響子はこれで泣き止んでくれるはず……

誰も反応しない。まるで俺など存在しないかのように響子は泣き叫んでいる。

おい、悪かったよ、こんなに長く隠れててさ。ちょっとした出来心だよ。だから意地悪はやめてこっちを向いてくれよ……

「これ以上は警察の仕事よ。響子、気持ちは分かるけどいったん出ましょう、ね？」
「嫌……　嘘……嘘よ……」
「宗司、響子をお願い。一度応接間に戻りましょう。皆、心が動転しているわ」

おいおい、動転してるのはお前もだろう。　この死体が俺？　変装した偽者に決まってる。顔がちょっと俯いてるから分からないだけだ。
いいさ、無視するならすれば。この死体の面を拝めば一目瞭然だ。正体見せろこの偽者がっ！

乱暴に伸ばした手が顎に触れた瞬間、死体と目が合った。間違えようもなく俺の顔。その瞳孔は悪魔でも見たかのように見開かれている。
なんだ、喉が苦しい。目の前がチカチカと明滅する。眼前の光景が水で薄めたように希薄になり、別の光景が映りこんでくる。

あいつが、あいつが目の前にいる。顔は陰になって見えない。苦しい、苦しいよ。助けてくれよ。そう思っても声が出ない。出せない。

「もうすぐ警察が来るわ。もしかしたら、遺書が発見されるかもしれないわね」
「でも、どうしてこんな……　今日の朝も楽しそうに笑っていましたのに……」
「悩みがあったなら僕らに相談してくれればよかった。何も言わずに自殺なんて……寂しいよ……」
「駿君……ひっく……駿君…っ」

「くそっ、馬鹿野郎がっ！」

おい、どうして置いていくんだよ。助けてよ、苦しいよ。なんで無視するんだよ。何でもいいから反応してくれよ……

扉の前で、あいつが立ち止まった。目の前のあいつも顔を上げる。振り返ったあいつと目の前のあいつの目がそろってぎょろりとこちらを向いた。

そこにあるのは見たことのない顔だった。これは誰だ。俺は知らない。この醜悪な顔は何だ？　人間の顔はこうも醜く歪むものなのか？

あいつは嗤った。まるで独立した生き物のように口元が蠢く。

目の前がかすんでくる。あいつも、ベッドも、本棚も、部屋の全て、世界の全てがぐにゃりと捩れて混ざり合う。

もう駄目だ。俺が死ぬ最後のそのとき、あいつの声を聞いた。

「サヨナラ、駿」

（後書き）

まあありきたりなので真相はバレバレだったと思いますが、一応。動機はまったく考えていません。すいません。

犯人は宗司と響子です。響子が部屋に潜んでいたというだけの話です。亮が出て行った後に出てきたわけです。
共犯というのはミステリーとしてはずるい気がしたので、申し訳程度に伏線を入れてます。
最後に首を絞められている光景を思い出す場面ですが、首吊り自殺に見せかけるなら正面から絞めるわけにはいきません。ですからここは宗司が首を絞めてます。
と思っていたのですが、背負って絞めても自殺に見せかけるのは困難らしいですね……　勉強が足りませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4580n/

葬られし真相

2010年10月10日14時09分発行